令和６年度　自己点検・自己評価結果

	評価内容
１．教育理念・目的・目標	今年は新カリキュラムを開始して初めての卒業生となる。すべて対面講義、臨地実習をベースに進めてきた。各教室に教育理念・目標を提示し日々学生の目に触れやすい環境とし、教育理念や教育目的・目標に沿って、各学年に応じたクラス目標を設定し、各学期末にクラス評価を行った。 国立病院の養成機関である独自性や地域のニーズに対応できる人材育成を主眼におき、看護専門職業人を養成している責務を教職員全員が共通認識し、看護教育だけにとどまらず、日々の学校生活においても社会人基礎力の醸成を常に意識した支援に努めている。社会人基礎力について、4 月の自己評価で 3 学年とも低かった項目は考え抜く力「創造力」であったため、演習や実習準備、学校祭やコンサート準備等、学生が社会人基礎力を意識できるように関わった結果、低値であった項目もすべての学年で上昇しており、今後も機会教育を行っていく。
２．教育課程	新カリキュラム開始後も科目の位置づけや教授時期について見直しを行い、今年度入学生より学びが積みあがるように一部変更をした。 複数講師に依頼している科目については履修期間を調整し、特に 15 時間の科目については講義が集中しないよう調整している。また、科目再履修者についても可能な限り履修がスムーズに行えるよう時間割調整をはかっている。テスト返却については学生からの意見も調整し、今年度から再試験該当者の閲覧を可能としている。 学生によるカリキュラム評価は、卒業時だけでなく各学年の年度末にも評価を行っており、全体平均は 3.4/ 4 点中であった。各学年のカリキュラム評価での学生の意見内容を検討し、学生の学習環境を整えている。 また今年度は、昨年度の卒業生が勤務する職場長に当校の教育目標の到達度について調査を行った。教育目標は概ね達成しているという評価であったが、多職種との連携・調整については実施に至っていないため評価は困難とのことであった。今後も就職先病院からの評価を得ながら学習に反映させていく。
３．教育活動・教育指導のあり方	今年度から学生定員が 40 名に減員しているが、演習やグループワークなどは半クラスにするなど効果的な授業になるよう対応している。学校感染症により欠席した学生には、病状を確認の上、希望者に対して web 授業にて対応している。講義における演習項目が、新カリキュラム後に追加・変更となっている科目もあるため、看護技術マトリックスを作成して技術演習と科目配置について検討し、学生の技術力や卒業到達度を加味して、新たな技術チェック項目を設けたり、技術試験を一部変更している。 教員が講義・実習準備などの時間が確保できるよう、事務職員と教員の役割分担を明確にしたり、実習指導に関わらない期間を設けるなど、時間内に準備が実施できるよう配慮している。突発的な学生指導についても、教員間で調整し対応をしている。 各科目の授業終了時には学生からの授業評価を受け、授業の改善に役立てている。評価用紙は 1 年生 73.5%、2 年生・3 年生は 100%と高い回収率を維持しており、全体平均は 3.5/ 4 点であった。全体で集計を行い講師個人が特定されない形で集計し、個人結果

	については個別に講師に結果を伝えている。授業研究については、教員全員が行い教員会議で評価し今後の授業に役立てている。
4．組織・管理運営	母体病院と連携をして教育を行っている。学校内の業務分掌は作成されており、それに沿って学校職員は各々の役割を果すよう努力している。教員は、直接的な教育活動以外にも学習成果につながるような様々な業務を分担しており、全教員で協力して学校運営を行っている。今年度から教員2名が母体病院の相談支援担当と看護部スキルアップ担当の併任となり卒業生の支援を継続している。
5．学生生活への支援	健康管理については、日頃から学生が感染予防行動が取れるように、また、学生自身での体調管理の必要性を意識して行動できるよう支援している。日々の学習相談やその他の悩みについては各学年担任が対応しているが、心理的なことについては臨床心理士と連携しながら対応し、学生相談室でのカウンセリング等を勧めている。 学生が毎月1回行う学生自治会の定例議会に教員も参加し、検討事項について指導を行っている。活動を休止していた部活動やボランティア活動、サマーコンサートやウインターコンサート、学校祭など企画・運営活動をしており、学生が主体的に考え行動できるよう支援している。 今年度は自治会室の不要コピー機を撤去して専用の部屋を確保するなど、自治会執行部が活動しやすい環境を整えている。
6．施設整備	教材教具は担当教員と委員の学生を中心に点検・整備を行っている。老朽化した教材は計画的に更新を行い、今年度はモデル人形を購入した。情報処理室のパソコンは全てウィンドウズ11に更新している。図書は毎年計画的に購入している。図書室の活用を活性化するため、利用頻度や状況を確認しながら文献の精選を行って学習環境を整えている。学生からの要望により今年度から貸出期間を14日間へ延長している。学生は書籍の借用以外にも自己学習スペースの利用頻度は高く、身近な学習の場として活用しやすい環境を整えている。 学生寮においても備品の確認を行い、今年度は防犯カメラやセンサーライトの更新を行い安心・安全な宿舎生活に向けて支援している。 また、今年度は情報処理室や体育館など病院職員による学校施設の使用頻度が増えている。快適な活用にむけて日頃よりメンテナンスに力を入れている。
7．学生の受け入れ	県内への高校訪問、業者主催の進学説明会への参加および高校教諭との交流会、およびオープンキャンバスを3回実施した。加えて学校祭で一般公開を行い、来場者にむけて学校生活の動画を流すなど、学校PRを行った結果、推薦入試の志願者は増加したが、一般入試倍率は昨年度より4割減少した。 近隣高校への講師派遣を行っているが、地域における看護師 PR の一環として中学への講師派遣についても模索している。今年度は初めて年度末に、高校生はもちろん中学生も対象に含めて学校見学会を実施した。
8．卒業生の状況	2学年末より進路面接を行い、個人の希望に沿った就職先を選択できるように支援を行っている。年々就職試験の時期が早まっているため、計画的に進路説明会や施設見学およびインターンシップへの参加、母体病院職員との交流会の開催と並行しながら進路相談や面接等支援を進めている。

	今年の卒業予定者 82 名の内、進学者 6 名、就職者 76 名(92.6%)である。就職先の内訳は、60 名(73.2%) が国立病院機構であり、そのうち 33 名 (40%)の学生が自施設に就職し、三重県内への就職者は 55 名(72.0%)である。 国家試験に向けて、今年度は 4 月から医師や教員による特別講義および業者による特別調養を実施し、効果的な学習につなげられるようにした。実習中も領域毎の実習とリンクさせ学習強化を図っている。チューター制に関しては、今までの不合格者の背景から、学力に応じ、より支援の必要な学生に指導がいきわたるように、レベル別でチューター制を導入した。長期休業中や、自宅自己学習期間も学習支援が必要な学生には、学校への登校を促し学習環境を整え、学力強化を図っている。 卒業生の支援として 6 月にホームカミングディを実施し、45 名(63%)の昨年度の卒業生が参加した。卒業生同士が現状報告や情報交換をとおして思いを共有したり、教員に感情を吐露する機会となっている。
9．社会への貢献	学校祭は母体病院と共催し、一般公開を行った結果、当日の来場者は 380 名(昨年比 85 名増)であった。また、教員による公開講座「ストレスとうまく付き合おう」が好評であった。 母体病院で、学生自治会を中心にサマーコンサートとウインターコンサートを企画・実施し、多くの患者・家族の方々と院内関係者に参加していただき病院職員も含め交流の機会となった。三重タイムズへの掲載により、県内の方に当校を知ってもらえる機会となっている。今年度は地域のボランティア活動に 27 名が参加し、地域住民と交流する機会を得ている。
10.研究・研修活動	今年度は国立病院総合医学会で、4 名の教員が研究発表を行い、看護人材育成に実践報告を投稿した。さらに、医療の広場に 1 件投稿、来年度 1 件の投稿にむけて準備中である。 各教員が計画的に研究発表、学会、研修に参加したが、月に半日の研究時間については、計画的に活用できない時もあり、今年度の研究取得時間は 36%であった。又、教員間で共同研究を行っている教員もおり、教員会議で中間報告を行い意見交換している。東海北陸グループ教育研究研修会における授業研究については 3 月 15 日に各研修グループで発表した。また他施設から研究調査の依頼があった場合は、可能な限り応じている。 対外講師活動としては、高校生対象の進路ガイダンスでの模擬授業や高校の看護探求コースの授業、近隣病院の実習指導者を対象とした研修会に講師として参加している。また、三重県で開催される実習指導者講習会、国立病院機構東海北陸グループ主催の実習指導者誤習会において、講師及び演習の助言者を担っている。
学校評価	ワーキンググループを中心に、4 月に各グループで昨年度の課題や学校関係者評価委員会をもとに、目標及び課題を明題にして取り組んでいる。毎年、自己評価・自己点検の結果、学校関係者評価委員会の結果をホームページ上に掲載しているため、引き続き掲載できるように準備し、改善すべき点を明確にして取り組んでいく。